

第三百一回 青葉会

三百回記念 向島吟行

平成二十三年四月二十八日(木) 雷門(集合) ↓尾張屋(支店で昼食) ↓  
観音様 ↓三社様 ↓被官稻荷 ↓墨堤 ↓桜橋 ↓三囲神社 ↓すみだ郷土文化資料館  
↓弘福寺 ↓長命寺 ↓言問団子 ↓桜餅(休憩) ↓志満(じま)ん草餅 ↓白鬚神社  
↓百花園 ↓料亭きよしにて句会・祝宴

〈参加者〉

☆川合万里子先生 伊賀山そらお 石川清 今井紀久男 大林猛 久米五郎太  
小西弘子(夜のみ) 豊田ゆたか 中野一灯 中山芳博 福島正明 山崎亜也  
山内天牛  
小川恭延 朱牟田恵洲 土谷堂哉 宮内規雄 渡邊盛雄

《互選句》

六点

☆三囲(みめぐり)のコンコンさんは春の貌(かほ)

猛 (万・紀・五・ゆ・亜・天)

四点

☆墨堤や句碑を巡りて春暮るる

五郎太 (万・そ・清・猛・弘・芳)

三点

☆花は葉に荷風歩みし路地の失せ

そらお (猛・五・正・亜)

二点

☆奇譚秘の落花浮べる姥が池

紀久男 (そ・清・猛・ゆ)

☆校庭に花の舞ひをり廃校日

恵洲 (弘・正・亜・天)

☆青柳の揺れたをやかに扇塚

万里子 (五・弘・ゆ)

☆春暮るる茶屋へ荷風の路地踏めり

紀久男 (万・一・芳)

☆奇譚秘の落花浮べる姥が池

弘子 (猛・正・亜)

☆うららかや朱の鮮(あたら)しき浅草寺

ゆたか (芳・亜・天)

☆校庭に花の舞ひをり廃校日

一灯 (万・そ・五)

☆葉桜や播磨屋寄進の手水鉢

全 (紀・猛・ゆ)

☆玉の井を偲ぶよすがや桜餅

亜也 (万・一・芳)

☆ふじ棚の舞台を輪舞ハチの群(むれ)

万里子 (そ・正)

五月場所が技量審査場所なる不粋な名目と聞きて

そらお (万・一)

大川に響け五月の触れ太鼓

紀久男 (ゆ・正)

☆工作船舫ふ墨堤若葉風

全 (弘・天)

☆墨東薄暑女と男が手を繋ぐ

猛 (清・一)

☆春揚羽三圍神社に参りけり

恵洲 (そ・芳)

☆打ち水をせし尾張屋の昼のそば

一灯 (万・芳)

☆この星を彷徨ふ魂へ花褥(しとね)

正明 (弘・亜)

被災地の子らの笑顔や風光る

天牛 (五・ゆ)

天空に向けて立つ塔春を呼ぶ

全 (清・正)

行く春を岸辺に座して隅田川

盛雄 (万・紀)

一点

☆祭壇に遺句追悼句雪柳

そらお (清)

☆墨堤の桜ふぶきを見たきもの

清 (猛)

☆憂国の志士往還せし山河春

全 (紀)

☆塔動き雲は動かず夏日かな

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

☆葉桜や荷風露伴と墨堤へ

全 (紀)

《番外句》

菜の花や二人農夫の煙草時	堂哉 (紀)
葉桜や川浪荒き橋たもと	ゆたか (そ)
落ち合ふは雷門や風光る	全 (紀)
春日なかボール蹴る児ら芭蕉の碑	全 (二)
墨堤にひなげし背伸びして咲けり	芳博 (二)
梅の実の色付く気配向島	正明 (天)
長命寺中身が見えぬ桜餅	全 (天)
海神 <small>(おだつみ)</small> の怒り何故 <small>(なにゆゑ)</small> 春悲し	規雄 (そ)
早引けて荷風忌近き向島	亜也 (紀)
桃の実の彫られし寺の八重桜	天牛 (清)
百花園筍だまつて顔だせり	全 (五)
春宵や出を待つ芸妓のさんざめき	弘子

●次回青葉会

五月二十六日(木) 午後六時〜九時 丸紅一階談話室  
 ▲当季雑詠各自五句 投句二句  
 「三百回記念合同句集」完成見込  
 「出品者に各2冊配布。3冊以上御希望の場合、3冊目から有料(ア長)」  
 六月二十三日(木) 午後六時〜九時 丸紅一階談話室  
 七月二十八日(木) 全 以上文責 紀久男

平成二十三年四月二十八日(木) 三百回記念向島吟行

一、雨上がり、すつきり晴れた東京。雷門に万里子先生以下11名集合(11:30)。尾張屋(支店)で天せいろ中心の昼食。呑まない筈でしたが誰かビールと焼酎を注文され乾杯。遅ればせの五郎太さんが加わり、どんどん追加。もつと呑みたそうでしたが立て込んできましたので切上げて出発(12:15)。仲見世通つて観音様へ。いつもの賑わいですが大震災の影響で中国人韓国人は見当りません。三社様で万太郎・川口松太郎・先代吉右衛門らの句碑、先代幸四郎一家寄進の手水鉢、花柳流の扇塚などを見物。次いで被官稲荷。新門辰五郎寄進の鳥居と先々代時蔵ら寄進の玉垣を見物。ここから向島へは七福神巡りされるなど土地に明るい清さんにガイドお願いしました。

絹漱先生、章彦さんお元気な頃、百花園で句会催したことがあります。三囲神社等、観光コース巡るのは初めてです。どこを通つてもスカイツリーが見え圧倒的存在感あり、絵になります。今迄日の当らなかつた御当地も漸く脚光を浴びる時節到来を思わせます。五郎太さんの六句句に詠まれている通り、句碑(狂句を含む)歌碑が多く、一寸食傷気味。初心の頃「はせを」が芭蕉のことと知らなかつたのを思い出しました。

見番通りに小学校あり。校名小梅! 粹ですな。(対照的に東武鉄道が「業平橋駅」を「スカイツリー駅」に変えるのは誠に不粹、野暮と云うもの。古い土地柄を考慮してほしいものです。) 校庭に鯉幟を揚げる作業中でした。恵洲さんの四句句(投句)は四月中旬、大鉄会の浅草向島吟行の作品の由です。清さんが近道を案内してくれたお蔭で病み上がりの正明さん、風邪気味の小学生も何とか歩き通せました。

「きよし」に到着(16:50)して休憩。高名な女将(オリエント考古学専攻。藤間流踊り手)

の挨拶。ビール呑み乍ら句作り。出句 $\beta$ 切(17:40)。清記と選句開始(17:50)。弘子さん到着してすぐ披露に入り、綺麗所待たせている為、テンポを早め、合評も端折つて終了(18:40)。

お待ち兼ねの祝宴。芸者五人と半玉が一人、一辺に花が咲いたようです。正明さんより三百回記念吟行の乾杯の挨拶。東京の花街(かがじ)で最多の芸妓(120名余)を抱え、新橋・赤坂に負けぬ芸達者が揃う向島。六人が御自慢の三味線・太鼓と踊りをたつぷり披露してくれました。宴酣(たけなむ)で芸者衆に負けじと十八番(おほこ)を天牛さん皮切りに次々に披露。――ゆたかさんの黒田節に芸者が踊る。万里子先生、弘子さん・そらおさん・亜也さん。半玉引揚げた後、集合写真。そして亜也さんの三本締。名残惜しみつつお開きとなりました(21:15)。

### 二、村岡英樹さん佐野明彦さん一周忌

三月十日(木) 村岡さん奥様、水泳部有志、市橋伸彦さんらと墓参(池田・五月山)会食(北千里)

御自宅リビングに私共の追悼句が額に掲げられておりました。

四月十日(日) 佐野明彦さん追悼謡曲会(神戸・北野町の御自宅:神戸市の伝統建築物指定)

神戸大学OB・丸紅平成会(赤田堅・方子御夫妻・山本正人・楠田美樹)、

勝部松美会・勝部育聲会の共催。御長男・妹さんも出席。

○花の曇遺影に捧ぐ謡かな (当日の拙句)

○追悼の「鉢の木」謡ふ花の午後 (全)

祭壇に遺句と追悼句をお供(そなえ)しました。

堅さんは「五月闇師たり兄たる君逝きぬ」の短冊をお供されました。

### 三、関係者近詠

車椅子下りて手毬をかがる夜 万里子

母の忌や手作り味噌の納豆汁 全

帰国待つ鱈大根を煮含めて 全

日溜りに猿の大的字春隣 全

独裁者去りしか春の雪つづき 全

トーストに味噌汁添へて春淡し 眞希子

深大寺

梅白し師にも師ありて並ぶ句碑 全

亡き父の枕に春眠食りぬ 全

二十一世紀の濃き蒙古斑草萌ゆる 全

春風と被る帽子を奪ひ合ふ 忠彦

しなやかな抵抗春のキャベツ切る 全

残雪や富士になつたり猫になり 全

堂々とドヌーヴ老いるおぼろかな 弘子

母なくてなんの草餅桜餅 全

半分を引きて二月の紙芝居 全

趣味会合減らしてひとり梅見かな 紀久男

春の星相模の夜の海覆ふ 恭延

桜咲く地球儀を手に新思考 和夫

―『萬緑』5月号―

卒業式終へて母連れ京めぐり 規雄

―「NHK俳句」5月号 西村和子選

むらがりて風湧(わか)しゐる諸葛采 允章

傷みやすきもののひとつ白椿 全

丹沢見え富士は見えざる霞かな 恵洲

被災地の子のVサイン風光る 全

―大鉄会四月

ゆつたりと風力発電山笑う 盛雄

吹かれつつ次の世見てる黒揚羽 全

切れぎれの思惟をつなぎし扇かな 全

生と死のいずれに傾ぐ富士樹海 全

―きさらぎ俳句同好会合同句集

蒼穹を横に拈げて懸大根 孤舟

竹馬の子の背ころりと夕日落つ 全

韋駄天の登(も)音真澄の枯野道 全

藩校の廊下の木目日脚伸ぶ 全

―「爽樹」3月号

五月七日

紀久男記